

令和 2 年 5 月 3 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02327

研究課題名(和文) 辺境の中世英文学

研究課題名(英文) Middle English literature in the fringes of the British Isles

研究代表者

和田 葉子 (Wada, Yoko)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：00123547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：中世英文学研究において、価値の高い作品であっても、イングランド以外の地域で生まれたという理由だけで、ほとんど研究対象とされていない作品が少なくない。その中で、1330年頃アイルランドで筆写されたLondon, British Library, MS Harley 913は重要である。この写本には一人の写字生による英語、ラテン語、フランス語で書かれた作品が収録されており、その多くが非常に優れた文学的技術を備え、当時の社会情勢を伝える興味深い資料となっている。3言語の作品は互いに密接な関係があり、そのコンテキストの中で、英語による作品がより正しく理解でき、それらに正しい評価を与えることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世英文学研究において優れた作品であっても、イングランド以外の地域で生まれたという理由で、ほとんど研究対象とされてこなかった作品が少なくない。1330年頃アイルランドで筆写されたLondon, British Library, MS Harley 913に収録されている、英語、ラテン語、フランス語による作品群を典型例として、文学的価値の高さと歴史資料としての意義の大きさを明らかにした。そして、そこで使用されている3言語による作品は互いに関連しており、作品群全体のコンテキストの中で、英語の作品を解釈することが重要であることも示した。こうしたアプローチの重要性を、この写本を具体例として知らしめた。

研究成果の概要(英文)：Quite a number of Middle English works have not been properly appreciated or fully studied in large part because they were composed in the peripheral areas of the British Isles such as the Welsh marches or the Irish Pale. The present study demonstrates that works of this category, such as those preserved in London, British Library, MS Harley 913, have considerable literary and historical value. Transcribed by a single scribe in Ireland around 1330, the Harley works, both prose and poetry, are written in English, Latin and French, and they cover a remarkable variety of genres: religious poems, Franciscan documents, political songs of historical importance, scurrilous satire, and so on. Moreover, despite being written in three different languages, these works are interrelated in content and tone, so that only by being studied as part of a cohesive whole can the full significance of the Harley Middle English works be understood.

研究分野：英語英文学

キーワード：Middle English fringes Latin French MS Harley 913 Ireland Franciscans history

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

以前から、中世英文学の作品や、それらを収録している写本の研究を続けている中で、中世英文学研究の対象をイングランドで書かれた作品のみに限っていてもよいのか、という疑問を抱いていた。イングランドの周縁地域とみなされてきたウェールズ、スコットランド、アイルランドなど、「辺境」の扱いをされていた地域でも、非常に優れた作品がたくさん生み出されていたことがわかってきたからである。実際、これまで中世英文学はイングランドで書かれたという前提のもとに研究が進められてきた。そのため、イングランド以外で書かれた中英語による作品の研究は非常に遅れているのが現状である。中世英文学史やアンソロジーをとってみても、「辺境」で生まれた作品は適切な扱いを受けていない。すなわち、ほとんど無視されているのである。この状況は、海外の中世英文学研究についても同じである。こうした偏見を取り除き、中世英文学をイングランドという枠を超えて、包括的に理解することの必要を強く感じ、このプロジェクトを立ち上げることになった。

2. 研究の目的

上記1. で述べた通り、正当な扱いを受けていない「辺境」の英文学作品の優秀性を明らかにし、中世英文学史において正しい地位を与えることが本研究の目的である。そのためには、イングランドと常に複雑な関係にあった中世の辺境で筆写された写本に焦点を合わせ、当時の政治や宗教等の混沌とした社会状況がいかに作品に絡み合い、影響を及ぼしているのかを考察する。視点をイングランドから辺境に移して、中世英文学を正しく捉えようとする新しい試みであり、英文学研究に大きく貢献する。

3. 研究の方法

まず、ウェールズ、スコットランド、アイルランドで書かれた中英語の作品が収録されている写本を、リストアップし、これらの写本についての情報を得られる文献と、それらが書かれた当時の各地域の政治、宗教、文化に関する参考文献を入手した。購入可能なものは順次購入し、それが難しい場合は海外の図書館の貴重図書室等でコピーしたり、ページの画像を pdf ファイルの形式でコンピュータに取り込むなどし、帰国後も利用できるようにした。コピーは A4 サイズに統一し、ファイルに整理して手元に揃えた。本研究の分野の性質上、日本では入手が非常に困難な資料が多いので、夏季休暇を利用した海外での文献収集が非常に役に立った。特に、今回の研究で、有益な結果に結びつく研究対象になった London, British Library, MS Harley 913 が筆写されたと考えられるアイルランド共和国の南東部に位置するウォーターフォードの市立図書館では、非常に役に立つ資料を得ることができた。また、ダブリンにあるアイルランド国立図書館でも、貴重な資料を閲覧することができたのは、たいへん有難かった。

さらに資料を揃えながら、研究を続けていったところ、先に述べた、1330 年頃、アイルランドで筆写された London, British Library, MS Harley 913 が非常に研究価値の高い写本であることがわかってきた。たいへん興味深い様々な作品が中英語だけでなく、ラテン語、フランス語で書かれており、異なる言語で書かれた作品同士の内容や表現が密接に関係しあっていることが明らかになってきた。それと同時に、この写本がどのような目的で書かれ、写字生はどのような人物であったのか、という疑問も湧いてきた。それを知ることによって、収録作品をより正しく、より深く理解することが可能になることもわかった。

そこで、中英語だけでなく、同じ写本に収録されているラテン語、フランス語による作品も読むことが必須であると確信した。ブリテン島やアイルランドでは、当時、3 か国語が使用されていたのであるから、中英語の作品のみに注目しては、収録作品群における英語の作品の真の意味や意図を考察できないからである。

まず、詳しく読んだのは、MS Harley 913 に書かれている、ラテン語で書かれたミサのパロディである。この作品は、ラテン語のミサの形式、言い回しを使った、到底教会では、唱えられないような内容の、ラテン語による滑稽なパロディになっている。内容だけでなく、ミサを筆写する時に通常、使用する字体やレイアウトも、本物そっくりなので、写本のフォリオを遠目に見れば、まるで、荘厳なミサがそこに記されているかのようである。神は酒の神バッカスになっており、女性のいる酒場で、飲んで、博奕を打ち、賭けに負けて、無一文になり、拳句の果てに服まで脱がされるが、それでも酒を飲み続ける懲りない若者の姿が描かれている。これは、西ヨーロッパの教会でかつて行われていた the Feast of Fools (愚者の祭り) を思い起こさせる。この祭りは、逆さまの祭りであり、下級聖職者が司教等に扮し、こうした馬鹿々々しく、しばしば不敬でさえある内容のパロディを実際のコスチュームを着て、教会で、パロディの典礼をいかにも恭しく行うというものである。MS Harley 913 のミサは、まさに、それに最適の作品である。この祭りはその性質から、やがて、禁止されるのだが、この写本が筆写された 14 世紀に、収録されているミサが、プラクティカル・ジョークとして実行されたのかどうかは、明らかではない。ただ、少なくとも、上述のように字体やレイアウトが視覚的に本物のミサとそっくりであるということから、見て楽しむ要素もあった、つまり、愚者の祭りが実際には行われなかったとしても、面白い作品として聖職者が仲間の間で回し読みしたり、唱えたりしていた、という可能性が推測される。

MS Harley 913 のミサのパロディの説明に多くのスペースを割いたが、それには理由がある。同じ MS Harley 913 の中に、*The Land of Cokaygne* (「コケインの国」) という英語で書かれた諷

刺詩がある。その国は地上の楽園であって、暗にこの国をアイルランドに見立てていることが、読者にはすぐに分かるように、この国の様子が巧妙に描かれている。そこでは、修道士たちが、あらゆる欲を満足させる生活をしている。ここには、西ヨーロッパで語り継がれてきた様々なパラダイスや天国の描写があらわれるが、それが諷刺のために使われており、前述のミサ同様、パロディになっている。他にも、ラテン語の謎々があり、近親相姦の結果、非常に複雑になった家族関係を解き明かさなければ答えが出せないようになっている。これほど複雑ではないが、古英語にも、似たような謎々の詩があり、そこには、聖書に登場する近親相姦をした人物がテーマになっている。原形になるものがある、すなわちパロディである点が、MS Harley 913 のラテン語の謎々にも共通している。

MS Harley 93 は、一人の写字生によって筆写されており、先に述べたように、当時、3つの言語がイギリスやアイルランドで使用されていた中で、この写字生は3つの言語を容易に読み、書ける聖職者であり、厳しい諷刺の効いた面白い作品を、この写本に綴り記録したと考えられる。その写本には、フランシスコ会の記録も残されていることから、写字生はこの修道会に属していたことが推測される。写字生が複数の言語を駆使できたことは、この写本に収められている別の作品、英語による子守歌をとってみても、よくわかる。写本の別のフォリオ(写本の一枚をフォリオという)に、その詩をラテン語に訳そうと試みた跡が残っているからである。全部のスタンザを訳してはならず、走り書きに近い状態で、何らかの理由で訳を途中でやめてしまったことが推測される。ちなみに、この作品はロンドンの大英図書館の展示ケースの中に、現存する英語で書かれた最古の子守唄として、その部分のページを開いた状態で展示されていたこともある。

さて、フランス語の作品については、Maurice FitzGerald (初代のデズモンド伯爵) (1356年没) が身に降りかかってきた不幸を嘆く短い作品があるが、s の音で始まる語を過度に使った頭韻詩となっている。そのすぐ前に筆写されている、もう一つのフランス語の詩は、f の音を、やはり過度に使用した頭韻詩である。このような、極端ともいえる頭韻詩は、同じMS Harley 913 に収録されている2篇の英語の詩、*Elde*(老齢)と*Earth*(土)に通じるところがある。*Elde*は、ある老人が自分の肉体的老いを一人称で嘆く作品であるが、伝統的な死の兆候の記述を織り込みながら、どこかコミカルな、しかし死が近づきつつあることを詠った恐ろしい詩に仕上がっている。この老人がよぼよぼである様子を描くスタンザでは、特に多くの頭韻が使用されている。*Earth* は、「人は土に帰る」がテーマであり、古英語の時代から多くの人が知っていたと思われる短い詩のパロディであると考えられる。この詩は、非常に手が込んでおり、英語のスタンザとラテン語のスタンザが交互に位置しており、ラテン語は英語のスタンザのおよその訳となっている。しかも、頭韻も踏むように訳されており、作者の作詞とラテン語の才能を余すところなく発揮した作品になっている。ここでは、頭韻だけでなく、*earth* という語には、土、人間、この世、所有物(富)等、複数の意味があるため、詩の意味を理解するのに、読み手(聴き手)に謎解きを求めるような作品になっている。これらすべての詩は、書かれている言語の違いにかかわらず、言葉遊びの要素がエッセンスとなっている点で、類似している。

周縁地域で成立した写本ゆえに、その土地に深く関係する政治的な作品が見られる。上記の歴史上の人物、Maurice FitzGerald の他にも、Piers of Bermingham が1305年に行った虐殺を英語で詠った詩もある。この作品が、アイルランド人を制圧しようとしていたアングロ・ノルマン人であるPiersを称えた英雄詩であるのか、あるいは、あくまで諷刺であり、彼の悪行を皮肉った詩であるのか、意見が分かれていたが、今回の調査によって、諷刺であるという結論が得られた。

また、内乱に荒れていたアイルランドの町、ニューロスで、住民が防衛のために、皆で力を合わせて町の周りに壁を作る様子を詠ったフランス語の詩がある。これも史実に基づいているが、少々事実を歪曲している。というのは、あらゆる職業の人々と共に、優雅に着飾ったご婦人たちまで、懸命に肉体労働に協力した様子が描かれているからである。これは、文学的な脚色であるうが、読んで楽しい作品に仕上がっている。

また、作者が大学で学んだことのある聖職者であることが、はっきり表れている *Nego* という作品もある。この詩も中世英文学史上、ほとんど知られていない。作品の大部分は中英語で書かれているが、所々にラテン語が効果的に使用されている。それらは、当時、スコラ学派の学者たちが、パリ大学を中心に学生に勉強させていた討論で決まって使われる「私は否定する」、「私は疑う」、「私は同意する」等の言い回しである。ある命題について、質問する側と、それに論理的に答える側に分かれて、質問者は相手が結局、論理的に正しく答えられなくなるように質問を次々と出し、答える側が論理的に矛盾してしまうと負けとなる、ゲームともいえる討論であった。また、この詩の中には「真か偽か」あるいは「真なる偽/偽なる真」とも解釈できるラテン語も見られ、あまりにも理詰めのスコラ哲学が「真実」とは何かを追及した結果、本来の信仰の道から逸れてしまったことを皮肉った作品となっている。中世に実際に起こった「哲学」と「神学」のどちらの学問が正当か、という論争を反映している。

以上のように、MS Harley 913 は、アイルランドで書かれていたという理由で、研究対象としてほぼ無視されていた、と言ってもよい状況であったが、この写本には、当時の社会を映す非常に優れた作品が収録されていることが、わかった。そして、英語だけでなく、ラテン語、フランス語による作品も精読し、その地域の歴史的背景を詳しく研究することによって、新しく正しい解釈に行き着くこと、そして、その作品の高い価値を証明することができることを確信した。

4．研究成果

最も大きな成果は、London, British Library, MS Harley 913 がイングランドの「周縁地域」、「辺境」と見なされているアイルランドで書かれたために、海外でも、これまで、本格的な研究対象として扱われてこなかった代表的な写本として、研究を深めることができ、今回の研究によって、中世英文学史にその名前を残すべき価値のある非常に優れた作品を収録している写本であることを明らかにしたことである。そして、歴史的背景の知識も作品の正しい解釈に不可欠であり、複数言語で書かれている場合には、英語だけでなく、その他の言語の作品も合わせて精読しなければ、テキストを正確に理解できないことがわかった。今回の成果は、研究発表をするとともに、多くの論文を英文で刊行し、Web 上にもアップした。その結果、すぐに反応があり、海外の研究者たちからも参考にしたいというメール連絡が入った。

特にアイルランドでは、国内では到底入手出来ない資料をたくさん閲覧、収集できたので、大きな成果につながった。そして、海外の中世英文学研究者と交流を続け、最新の研究について情報交換を行うことができた。

さらに、今回の研究を行っている間に、次のプロジェクトに発展するテーマが見つかったことも大きな成果の一つであった。それは、中世のブリテン島と周辺地域の社会において、英語、フランス語、ラテン語の3か国語の使用が行われていたが、そのような状況で成立した3言語による作品を収録した多くの写本について、3つの言語がどのような関係になっているかを探るといえるものである。そこには、3か国語、時には4言語（例えば、アイルランドの場合は3言語に加えてアイルランド語）をめぐる社会の実態が反映されていることが予想される。写本の研究ではあるが、同時に、当時の社会における多言語使用の状況を解明する研究でもある。有難いことに、引き続き2020年度から、科研費によって新たな研究「3言語使用の社会における中世英文学」を開始出来ることになった。このように今回の研究が次の研究へと発展するきっかけになったという意味でも、意義の大きい研究ができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Yoko Wada	4. 巻 52
2. 論文標題 Scribal glosses to Elde and Earth in London, British Library, MS Harley 913	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 79-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yoko Wada	4. 巻 49
2. 論文標題 The poem Nero of London, British Library, MS Harley 913: a satire on medieval disputes of philosophy and theology	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Kansai University Institute of Oriental and Occidental Studies	6. 最初と最後の頁 207-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 和田葉子	4. 巻 6
2. 論文標題 14世紀のアイランドで書かれたLondon, British Library, MS Harley 913に見られる「愚者の祭り」の諸相	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Neo-ANGLICA	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 和田葉子	4. 巻 48
2. 論文標題 ロンドン大英図書館所蔵Harley 913写本に収録された中英語詩Lollaiとそのラテン語版の関係についての一考察	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 127-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 和田葉子
2. 発表標題 London, British Library, MS Harley 913収録のThe Land of Cokaygneに見られる逆さまの世界
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所研究例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoko Wada
2. 発表標題 A Reading of The Land of Cokaygne
3. 学会等名 広島英語研究会（第60回）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田葉子
2. 発表標題 A Reading of The Land of Cokaygne
3. 学会等名 広島英語研究会（第60回）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田葉子
2. 発表標題 London, British Library, MS Harley 913収録のThe Land of Cokaygneに見られる逆さまの世界
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所研究例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田葉子
2. 発表標題 天国への行き方教えます：14世紀の諷刺詩 The Land of Cokaygneにおける"dritte" について
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所研究会例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 和田葉子
2. 発表標題 London, British Library, MS Harley 913に収められた謎々の謎：中世ラテン語によるややこしい家族関係
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所研究例会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Yoko Wada et al	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Kansai University Institute of Oriental and Occidental Studies	5. 総ページ数 220
3. 書名 Trends in Eastern and Western Literature, Medieval and Modern	

1. 著者名 Yoko Wada, Masao Kondo, Patrick O'Neill, Wataru Hirata, Shu Tsuzumi, and Motohiro Kawakami	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Kansai University Press	5. 総ページ数 212
3. 書名 From Medieval to Modern: aspects of the western literary tradition	

1. 著者名 木村正俊、松村賢一、和田葉子、有光秀行、有元志保、池田寛子、岩瀬ひさみ、岡本広毅、風間泰子、加藤昌弘、川成洋、北文美子、小菅奎申、小宮真樹子、佐藤容子、嶋崎陽一、下楠昌哉、少路邦子、高名康文、立野晴子、田中美穂、寺本圭佑、梨本邦直、野口結加、林邦彦、春木孝子、疋田隆康、菱川英一、平島直一郎、廣野元昭、不破有理	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京堂出版	5. 総ページ数 450
3. 書名 『ケルト文化事典』 「ギラルドゥス・カンブレシス」の項目	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----